

内村鑑三における万人救済論

岩野 祐介

序

筆者は、内村鑑三の聖書解釈テキストを主な素材として、彼のキリスト教思想の内実を明らかにすることを研究の目的としている。本稿を開始するにあたって、まずこのことについて2008年現在の、筆者の意図を少し記しておきたい。

聖書解釈を通じた内村鑑三研究

内村鑑三は、日本のキリスト教関係者・指導者の中でも、おそらく最も著名な人物の一人であろう。その理由としては、不敬事件をひきおこしたこと、日露戦争に際して非戦論を唱えたこと等があると思われる。しかしその知名度の割に、彼のキリスト教思想の内容それ自体はさほど明らかにされてはいないのが実情である。不敬事件が信仰の自由と関わる政治的に重大な問題を象徴するものであることは確かである。彼の非戦論もまた日本の平和思想史を考える上で重要な位置を占めるものであろう。しかし彼が不敬事件をひきおこした背景で、どのようなキリスト教思想がはたらいていたのか、あるいは非戦論の主張に及んだ背景ではどうであったのか、ということについてはさほど注目されていないのではないであろうか。また、内村鑑三を創始者とする「無教会主義」という用語は、日本生まれの特異なキリスト教の一形態として知られてはいても、それに対して既成の教派教会に対する批判である、という以上の理解はさほど浸透してはいないのではないであろうか。概して、彼のキリスト教思想が広く知られているというわけではないのである。

1900年『聖書之研究』誌を創刊して以来、内村鑑三の活動の中心は、聖書の研究であった。にもかかわらず、彼による聖書研究の業績そのものを通して、彼のキリスト教思想を明らかにしようとする研究に関しては、多くの積み重ねがあるとは必ずしも言えないのが現状である。もちろん文明評論を書いても内村は一流であり、さらにその文章には人を惹きつけてやまない魅力がある。しかし、内村が残した膨大な量の著作において、最も大きな割合を占めるのは聖書研究テキストなのである。とも

なれば、まず聖書研究者としての彼を捉えるべきではないだろうか。確かに内村は多面的・多層的な人物であるが、「社会思想家」「評論家」といった要素は内村による聖書研究から、その結果として出てきたものなのではないか。

ところが前述のごとく、内村といえば一般的には「不敬事件の内村」として知られているのである。そのような場合、注目されるのは彼の宗教性・キリスト教思想よりも、社会に対する洞察ではないかと思われる。例えば家永三郎が注目し高く評価するのは、旧約聖書の預言者を思わせる内村の社会的活動、特にその倫理性、道徳性の（再）構築を目指すような言説である⁽¹⁾。また、英語圏において最も総合的な内村研究書を著したハウズは、その中で「内村は宗教を求めていたというよりもモラルの典拠を求めていたのではないか」、との指摘をしている⁽²⁾。しかし内村を社会批判へとかりたてた内的な動機を辿っていけば、それが彼の宗教性の根幹を成す救済体験と、そしてそこから導き出された道徳性へつながることは明らかなのである。家永は内村が独立伝道者としてキリスト教伝道に専念するようになったことを、社会からの退行と見なす。しかし内村において宗教的であることと、道徳的・倫理的であること、及びその社会における実践形態としての社会正義を追求することとの間には密接な関連性があるように思われるのである。内村はキリスト教伝道を通して社会へ間接的に働きかけ続けたのではないのであろうか。またハウズに代表される、内村における義の強調からその倫理性に着目する見方に関しても、同様のことが言えるのではないかと思われる。つまり内村において、義である、すなわち正しい関係性にあることと、他者との間に隣人愛を働かせることとは強く結びついているように思われるからである。そして内村においては、全ての愛は神に由来するものであるのだ。内村の社会性を明らかにしようとするのであれば、その宗教性・キリスト教思想に踏み入らざるを得ないのではないであろうか。そしてその土台は、聖書にあるのである。

現代における内村鑑三研究の意義

もちろん内村による聖書解釈を、現代的な視点から見直した場合、そこには多くの問題がある。現代の聖書学の基準に照らした場合同意できないような見解も多くあるであろうし、「ポリティカリー・コレクト」かどうかという点に関しても多くの問題がある。

しかしその問題は、そこにおいて内村の生きる、当時の日本の状況を反映しているということもできる。そして内村は、自分の語りかける相手は、日本語を話していて、

(1) 家永三郎の内村論については、家永「近代精神とその限界」『家永三郎集 第四巻 近代思想史編』（岩波書店、1998年）を参照した。

(2) John F. Howes, *Japan's Modern Prophet: Uchimura Kanzo 1861-1930*, 2005, UBC Press, p.388.

日本の文化・伝統（その内実はさておいて）のもとで生活している、ということを感じており、その人々に伝わりやすいような語り方で基督教の福音を語ろうとしたのではないか、と思われる。またその意味では、内村の基督教思想が、彼自身が言うように「旧い信仰」であり、熊野義孝や土肥昭夫が述べる⁽³⁾ように思想としてはとり立てて新しいものをつけ加えたと言えないとしても、その語り方、表現の点では現在においてもなお学ぶべきものがあるように思われるのである。

内村鑑三の基督教思想に対する筆者の主な関心は、内村が一方で信仰とは個人のものである、ということ強く主張しながらも、同時に人々への働きかけをやめなかったのはなぜか、あるいは、社会とそれを構成する人間に対する希望をどこからどのように得ていたのか、という点にある。一方で人間の無力さ・愚かさに対し絶望的になりながらも、内村は何故最後まで社会に対する働きかけを続けたのであろうか。内村の墓碑に「I for Japan, Japan for the world, the world for Christ, and all for God」と刻まれていることは有名である。では個人の信仰が、どのようにして世界全体へと広がっていくのであろうか。このテーマを解明することは、教会の活性化といったやり方とはまた別のやり方で、現代の日本社会における基督教、あるいは宗教の存在意義を取り戻すことへと繋がるであろう。

筆者はこの問題を明らかにすべく、内村の贖罪信仰という観点、及び創造者たる神と被造物としての人間という観点から内村の著作を分析研究し、結果、内村が人間を根本的に受動的な存在であると考えながらも、切実に救済を求めるその感受性については一定の信頼をおいていることを確認してきた。

内村は贖罪信仰を身につけた自らの体験（内村の用語法においては「実験」）を通して、人間が自らの罪ということに関しては全く無力であり、徹底的に神に依り頼むことでしかその罪悪感から救われる方法はない、と考えるに至った⁽⁴⁾。内村が苦しめられたのは、自己中心性とそれに対する嫌悪感、罪悪感によってである。内村によれば、自己中心性とは、人間だけで何でもできるのであるから神など必要ない、として神から離れてしまった人間の原罪と関わるものである。神の似姿として創造された人間は、その能力を過信し誤用して罪に落ちたのである。しかしその神の似姿であること、そしてかつて神と親しく交わったことの故に、父なる神を慕い、神との正しい関

(3) 例えば熊野義孝によれば内村の基督教思想は「穏健かつ常識的」（熊野「内村鑑三の『信仰・評論・思想』」『熊野義孝全集12』新教出版社、1982年、297頁）であり、土肥昭夫によれば内村の基督教思想に「ことさらに独創的なものはない」（土肥『日本プロテスタント・基督教史』新教出版社、1980年、187頁）。

(4) 例えば内村鑑三「罪とは何ぞや」（1910年、『内村鑑三全集17』／『内村鑑三全集』1980-84年、岩波書店刊。以下『全集』と表記）や、内村『余は如何にして基督信徒となりし乎』（岩波文庫、1938年）におけるいわゆる「二度目の回心」に関する部分などにこのことがあらわれている。

係を取り戻したいと願う心もまた人間に生ずる⁽⁵⁾。内村はこのような罪・罪悪感から逃れたいと切実に願う人間の感受性に対しては一定の信頼を示し、また自分と同じように苦しんでいる人間に対する共感を抱き続けたのだと考えられる。

それでは内村は、いかにして罪に苦しむ人々へ語りかけようとしたのであろうか。彼が罪意識から解放され救われるということと、人々の苦しみということとはどのような接点を持つのであろうか。

本論に至るまでに筆者は、内村における個人の信仰と社会とをつなぐ要素として、愛（特に隣人愛）、義、祈り、といった要素に着目してきた。これらは本論とも密接な関わりをもつものであるので、以下に概略を示しておく。

愛には、神の愛（及び、それを受け入れた人間による愛）と、人間の愛（また情の愛、肉の愛とも表現される）とがあると内村は考える。神の愛は人間の愛に先行しており、人間は神に愛されることにより他のものを愛せるようになる。この神の愛は、自己に向かってではなく、外に、他に向かって働く愛である。人間の愛は基本的に自己愛・自己の延長への愛であり、これは過剰に働く愛のためとして義にもとるような行為までをなさしめるようなものである。しかし、この情的な愛が人間にあるからこそ、最も情的に愛される存在である我が子を犠牲とした神の愛の深さを、人間は感じ取ることができる、と内村は考える。また、神の愛が媒介されることにより、情的な愛が絶対化されることを防ぐことも可能になる。神の愛はいわば義を含む愛、義と共にある愛なのである。そしてこのような、わが子を犠牲としてまで人間を義としその罪を赦すという、神の偉大な愛に対し、応答しようとする意志と心が人間に生ずる。そこで人間は他者を愛することにより、この神から受けた愛に対し応答する。具体的なこの現実世界にある間、愛の直接的対象として、神を把握することはできないからである⁽⁶⁾。それは、具体的な行動としては他の人間に対して正しくふるまうこととしてあらわれるのであり、すなわち隣人を愛することに他ならない。内村において、社会正義、隣人愛と神の義なる愛（あるいは義をその内に含む神の愛）とは切り離せないものである。ゆえに、神の義ということは厳しく恐ろしい結果をもたらすだけの裁きではなく、人間を赦し、救い、完全な存在とするためのものであることになる。さらにこの信仰を通して、将来への希望、差し当たっては明日への希望を、人間は実感することができる。

このように内村によれば、愛をはじめとした人間の働きは、実は全て神のもとにあ

(5) 例えば内村「創世記第1章～第8章」（1900-1903年、『全集8』）等で原罪に関わる内村の思想を見ることができる。

(6) このような愛にまつわる観点の典拠は、内村「愛の波動」（1905年、『全集13』）、内村「愛情の充溢」（1907年、『全集15』）内村「神の愛」（1919年、『全集25』）等である。

る人間の働き、という多層的なものなのである。何かを人間がなすということは、神に従い神と共になすということに他ならない。人間そのものは無力な弱いものであるが、神に依り頼むことにより、自分だけでは為し得ないようなことを為すことができるようになるのである。根本的には自己中心的な存在である人間が他を愛するようになるのは、神の力を与えられているからである。自己中心性を神により砕かれ、その枠を超えるのである。ただし、否定されるのは自己中心性であって、自己そのものではないように思われる。何故ならば、「恩恵の受器」⁽⁷⁾としての自己の存在意義を内村は認めているからである。

同じ構造は義や祈りに関しても見られる。内村において、義であるとは正しい関係にあるということであるが、人間が神との間に正しい関係を築くことができるのは、神の愛により罪人のままでありながら神との正しい関係に迎え入れられるからである。そして神により義とされた人間は、人間同士の関係においても正しく、すなわち義であろうとする。祈りにおいても、同様に人間が祈るということは、人間の内において神、キリストが祈るということである、という構造が見られるのである。そしてそこで祈られる内容には、自らの救済のみならず、他者の救済が含まれることとなる。

…之れ必ずしも自己の為の祈を禁じ給うたのではない、聖書の中にも「神よ罪人なる我を憐み給へ」との祈がある、然しながら普通の場合に於て祈は会衆の全体に亘らなければならぬ、家庭に於て全家族が恵まるゝに非ざれば我は恵まれないのである、集会に於ても亦然り、^(また)全員共に恩恵に与からん事を願ふ、…⁽⁸⁾

このように、全員が恩恵を受け救われると考えることで自分も安心して救われることができる内村は考えるのである。人間の救済とは、一人一人の人間が確かに自分は救済されたと安心し、満足できるものでなければならず、それは当人以外の他の人間がこの人は救われる、救われない、等と判断できるようなものではない。その意味で救済は個人の問題であり、宗教は個人的なものである。しかし、その一人一人が救済される過程で、同じ集会にいる兄弟同胞の救いから、あるいは敵の赦しまで、様々な他の人間との係りが問題となる、ということになる。人間は必ず他の人間との関係の中で生きているものである。ゆえに、人間が自らの救済を実感するためには、救済されるのが自分（自分たち）だけではない、という確証が必要となるのである。人間は神のみならず、他の人間との関係の中で生きているのであり、自らの救済体験を通

(7) 「恩恵の受器」という捉え方は、内村「祈禱」(1911年、『全集18』)等に見られる。

(8) 内村「主の祈禱と其解釈」、1919年、『全集25』、116頁。なお引用した内村のテキストに付されたルビは、通常のルビが原文から添えられたもの、□に囲まれたルビが全集編集者により添えられたものである。

して他の人間に対する愛を確認すると言っているのではないだろうか。

内村鑑三における予定説と万人救済説

そこで本論では以下、この救済ということに着目し、内村の救済論を通して個人の信仰と社会性との繋がりをさぐることを試みることにする。個人の救済だけでなく他の人間の救済が問題となる、ということは、救済の範囲を問題にしている、と換言することが可能ではないであろうか。

伝統的なキリスト教思想においては、神は救うものを選ぶ、と考える立場がある。あらゆる面において人間に対する神の優先・先行を主張する内村においても、事態は同様ではないか、と考えられる。しかし、実際はさほど単純ではないのである。結論を述べると、内村は予定の教理について考慮しつつ、彼なりの万人救済説に辿りついているように思われる。以下では、内村による予定説と万人救済説、それぞれを解釈したテキストを分析し彼の救済論を明らかにすることにする。

予定説

「予定の事」

内村は著述活動を本格化させて以来、しばしば予定説について言及している。『聖書之研究』を創刊する直前である1900年7月には、内村は『東京独立雑誌』に「予定の事」を掲載した。なお、ここで内村が予定説の典拠として挙げる聖書箇所は、ヨハネ伝6:44、15:16、ロマ8:29-30、9:15-16、9:18、エフェソ2:8、エレミヤ1:4-5等である。この文章における、予定に対する内村の理解は以下の通りである。

人の救はれるのは全く神の恩恵に依るのであつて、人の意思の如何に関はず、神は救はんと欲ふ者を救ひ、呪^(のろ)はんと欲ふ者を呪ひ給ふとの事であります⁽⁹⁾。

そして、このことは一見不条理にも思われるが、そうではないと内村は続ける。救済の予定とは、人間に生まれつき様々な才能が与えられ、それらが人によって異なっているようなものであると彼は述べ、与えられた才能が開花するよう神が取り計らうのが理にかなったことであると同様、救われるべき者を救うのもまた不条理ではないとするのである。そしてまた、予定から外れて救われない人間とは、「純然たる

(9) 内村「予定の事」、1900年、『全集8』、250頁。

『世界の人』「此世を以て満足し得る者」であり、故にそのような人間は「神に選ばれて天国に行く事が出来ないとして神をも恨む者ではありません」と言う。救われない人間は、その代わりこの世において十分な成功をなしながら、心に罪の苦痛を感じず人生を楽しむ事ができる。逆に、選ばれている人間とは悔い改めの必要を感じて苦しまずにはいられない人間である、ということになる。そのような人間は、救われない人間とは対照的に、この世において様々な苦難に遭遇する。そして内村は、聖書が語るその実例こそ預言者エレミヤであり、またイエス・キリストであるとするのである。故に苦難、不安があるということは、選ばれているということでもある、ということになる。

…神は世人の少しも知らない斯う云ふ苦痛を神の選び給ひし者の上に〔くだ〕降し給ひて彼の改善進歩を促し給ひます、彼に苦痛と憂慮との絶へない間は彼は確かに慈愛の神の懐の中にある者であります。

夫れでありますから、私共が予定の事に就て非常に心配する間は私共の救済は確かです、亦私共に世人の迫害、憎悪、擯斥の絶へない間は私共の予定に就て心配するに及びません、…⁽¹⁰⁾

ここでの内村は、救われない人間が救われないことそれ自体にはさほど問題性を見出していないことを確認した上で、続いては 1904 年「予定の教義」について検討してみよう。

「予定の教義」

「予定の教義」は内村が自問自答による問答形式で、予定説について述べたものである。なお、ここで内村が予定説の典拠として挙げる聖書箇所は、ロマ 8、ガラテヤ 1、エレミヤ 1:5、イザヤ 49:5、アモス 7:14-15、ヨハネ伝 1:48、15:16、第 1 ヨハネ 4:19 等である。ここでの内村の論における特徴は、予定ということを召命と結びつけて説明していることである。

召命もまた、神による選びであることは言うまでもないであろう。エレミヤの召命に典型的に現れているように、預言者は特別な義人であるから預言者となったのではなく、ただ神によりそのように選ばれたものである。そしてその選びが神によるものであるとの確信があるからこそ、畏るべき言葉を敢えて語ることができるようになる。自分はただの若者に過ぎないと躊躇し逡巡するエレミヤの背中を、お前ではなく私が

(10) 同前、263 頁。

語るのだから心配することはない、と神がおすがごとくに、である。人間が何かを為すということは、実は人間が為すのではなく神がそう為させているのだ、と内村が考えていたことについては前述した通りである。それは換言すれば神による選びなのである。内村は自分自身についても、次のように語る。

私は神の撰りに余儀なくせられて、無理やりに基督信者と為さしめられた者であります、…⁽¹¹⁾

…私は第一に何故に世には私に優つて遙かに善い人がありますのに、其人が神のことを聞くも神を信ずるに至らない乎、其事が分かりません、第二に、神が私の心に顕はれ給ふ時は私の愛国心が最も高く、私の公義心が最も旺なるときではなくして、私の失望落胆の時、私の心の中が殆んど百鬼夜行と称すべき時であります、此事はドウ云ふ理由である乎、其事が分かりません、畢竟するに神に関する事は私の実験に由りますれば唯「意外」と云ふより外はありません、…⁽¹²⁾

また内村は「予定の教義」において、先の「予定の事」では触れなかった伝道の問題について触れる。すなわち、救われるか救われないかが全て神の選びによるのであれば、伝道ということに何の意味があるのか、という問題である。いわく、「若し予定にして真理なりとすれば、人は自己の救済を求めても無益ではありません乎、亦他人の救済を計るの動機も全く無くなつて仕舞ふではありません乎」。この疑問に対する内村の答えは、伝道ということのあり方を考え直すところからはじまる。伝道の目的とは、人を救うことではない、というのである。

…基督教の伝道とは…我れ救はれて彼れ墮落するが故に我れ彼を済度し呉れんと云ふような高ぶりたる慈悲心より出るものでもありません、…人を救はんとするのが基督教伝道の最大目的ではありません、…⁽¹³⁾

それでは伝道の目的とは何なのか。内村は続ける。

基督教の伝道は一つは表白であります、是れは「汝、罪を悔ひ改めよ」と云ふのではなくして、「我れ我が神の恩恵に由りて斯く成るを得たり、余は汝に此事を知らせんと欲す」と云ふ事であります⁽¹⁴⁾、

(11) 内村「予定の教義」、1904年、『全集12』、183頁。

(12) 同前、184頁

(13) 同前、190-1頁

(14) 同前、191頁。

基督教の伝道は第二に感謝の祭事であります、…我等の伝道はキリストの愛に励まされてあります、我等は沈黙を守らんと欲して守り切れないからであります、…心の奥底に働く神の愛に刺激せられて自発的に着手する事業であります、基督教の伝道は義務ではありません、特権であります、快樂であります、…⁽¹⁵⁾

このように伝道は福音の表白、恩恵への感謝であって、人を救うことがその目的ではないというのである。よって内村によれば、「信者を作くるために伝道は致しませんが、然かし信者を発見するためには熱心を以て之に従事致します⁽¹⁶⁾」ということになる。内村が伝道それ自体を喜びと捉えていたことは、彼がその生涯の最期に至るまで伝道を続けた理由の一つであり、極めて重要なことであると思われる。一方、ここでも内村は、救われない人間が救われないということそれ自体については、特に述べてはいない。

万人救済説

「戦場ヶ原に友人と語る 神の無窮の愛について」

予定説に関する理解を示す一方で内村は、神の無限、全能ということに対する深い信頼から、神は全ての人間を救う、との信仰を抱いてもいる。その根本は、自分の罪深さに対する自覚である。1908年「戦場ヶ原に友人と語る 神の無窮の愛について」において内村は、次のように語っている。

余が此説（引用者注：万人救済説を指す）を懐く重なる理由は個人的である、余は思ふ、^(も)若し世に救はれない人が一人でもあるとするならば其人は余自身である、余は罪人の首である、故に余が救に漏れざらんがためには、すべての人が救はなければならない、万人救済は余一人の救済のために必要である、余は普遍的救済を信ずるに由てのみ、余自身の救済を確かめることが出来る⁽¹⁷⁾。

予定説においては、自分が救われるかどうかという確信を得ることはできない。それは神の選びに属することだからである。しかし選びということがないのであれば、誰でも救われることになるであろう。内村は救われない人間が救われないことの問題を、自らの問題として扱うようになったのである。ただしこの万人救済とは、無条件

(15) 同前、191-192頁。

(16) 同前、193頁。

(17) 内村「戦場ヶ原に友人と語る 神の無窮の愛について」、1908年、『全集16』、114頁。

の救済ではない。

…余が普遍的救済を信ずると云ふは人は悔改めずして救はるゝと云ふのではない、神の方面に於ては万人救済の途は既に完全して居るから、人は何時なりとも悔改に由て其救済を己の^{もの}有となす事が出来ると云ふのである、爾うして若し人が悔改めないならば神は永久に彼の悔改を待ち給ふのである、悔改は神の歎喜であつて、人の利益である…⁽¹⁸⁾

悔い改めさえあれば、誰もが救われるという万人救済説なのである。ゆえに、罪に悩み悔い改めを求める不安な心があれば救われる、という点においては、先の予定説に関する見方と共通していると言えるかもしれない。神の愛は必ず与えられている、あとは人間がそれに気付けばよいのである。であるから、仮に全ての人間が救済されるとしても、そのことを知らしめるための伝道は不可欠である。翌 1909 年 7 月、「余の信仰の真髓」において内村は再び万人救済を扱うことになる。

「余の信仰の真髓」

「余の信仰の真髓」で内村は、愛そのものである神は必ず全ての人間を救うであろうことを再度述べる。そして救われなくてもいいという恐れよりも、必ず救うであろう神の愛について知ることの方が、人間の悔い改めを呼び起こす動機としては強い、と主張するのである。

…罪人は果たして神の^{いかり}忿怒を聞て恐怖の余り其罪を悔改めるのであらふ乎、余は爾うは思はない、少くとも余の実験は其正反対である、余自身は神の忿怒を聞いて震へながら悔改めたのではない、忿怒は人を絶望せしめざれば彼を^{かたくな}頑剛にする、罪は^〇忿怒を以てしては^〇去らない、^〇愛のみ能く^〇罪を^〇征服^〇することが出来る、…⁽¹⁹⁾

神の愛とそのあらわれであるキリストの十字架上の死により全ての人間の罪は除かれたと内村は言う。そしてそれを知れば人は必ず悔い改める、と内村は考えるのである。この万人救済説に関する思想と、予定説に関する思想とに内村なりの整合性を与えてみせたのが、1926 年「再び万人救済説について」である。続いてはこのテキストを検討してみたい。

(18) 同前、116 頁。

(19) 内村、「余の信仰の真髓」、1909 年、『全集 16』、424 頁

「再び万人救拯説について」

内村は「再び万人救拯説について」において、まず予定説と万人救済説、それぞれが聖書の根拠を持つことを示す。前者はマタイ 22:14、25:46、ロマ 9:27 等であり、後者は第1テモテ 2:3-4、4:10、第1コリント 15:22、コロサイ 3:11、ヨハネ伝 3:16、ロマ 11:25、イザヤ 19:24,25 等である。このように両者ともに聖書から導き出されることができる以上、どちらかが真理なのではなく、どちらも真理であるに違いないと内村は考える。

しかしそれでは矛盾が生ずることになる。ここにおいて内村は、「救い」の内容が問題ではないか、と考えるに至るのである。

…両説の矛盾を除去する為の唯一の鍵は「救ひ」の何たる乎、其説明如何^(いかに)に於て在ると思ふ。「救ひ」とは福祉に入る事であると云ふが故に、之を自己中心的に解するが常である。人が滅びるに対して我は特別に救はる、故に感謝すると云ふ。故に我れ先づ救はれんと欲し、次ぎに我が愛する者の救はれん事を欲す。此世に在りては「救ひ」とは何処までも自己的の辞である。そして「救ひ」をさう解するが故に、万人救拯説に対して不満が生ずるのである⁽²⁰⁾。

このように内村によれば、「救い」の内容を滅びに対する救い、「福祉」(安寧な状態に入ること、といったニュアンスであろうか)と考えることが問題なのであるという。そう考える限り、善人と悪人とが同じように救われるということが理不尽となり、また万人救済説は道徳を崩すものであるようにも思われるようになるのである。それでは「救い」とはいかなるものであると内村は言うのであろうか。

…「救ひ」は特に自己より救はるゝ事である。救ひの一面はたしかに自己に死する事である。即ちイエスが曰ひ給ひしが如し。

その生命を得る者は之を失ひ、我が為に之を失ふ者は之を得べしと。即ち生きんと欲する者は死し、死する者は生く。救はれんと欲する者は救はれず、救はれざるも可なり唯神と人の為に尽さんと欲する者が救はるとの事である⁽²¹⁾。

(20) 内村「再び万人救拯説について」、1926年、『全集30』、174頁。

(21) 同前、174-5頁。

確かに内村自身の「二度目の回心」の経験⁽²²⁾に照らして考えてみても、救済には自己からの救済という側面がある。内村は自らの鋭敏な良心と罪悪感とにより、自分で自分を追い詰めて苦しんでいたものであり、十字架のイエスによる贖罪を信じることにより、そこから逃れることができたのである。

では、内村の言うように救いの内容が自分を捨ててもよいような心の状態に到達する（神によりそうさせられる）ことであるとすると、何が変わってくるのであろうか。内村は述べる。

…我が救はれしは我が為に救はれしに非ずして、人を救はんが為に救はれし事を。「救はる」とは自己を忘れて他を救はん⁽²¹⁾と欲する状態に入る事である。神が特別にイスラエルを選び給ひしは、彼等を以て全人類を恵まん為であつた。神が我等を救ひ給うも同じある。特別に我等を愛し給ふからではない、世を愛し給ふが故に、我等を以て世を救はんが為である⁽²³⁾。

このように、救われた＝神に選ばれたのは、さらなる他の人々の救いのためである、と内村は解釈したのである。救われない人間とはまだ救われていない人間なのであり、まだ救われていない人間がいるということは、救われた人間にとって大きな悲しみを感じさせることなのである。何故ならば、救われることは大いなる喜びを伴うからである。内村は続ける。

神は部分よりも全体を愛し給ふ。そして時に部分を愛し給ふは之を以て全体に対し其愛を顯はさんが為である。少数者を救ひ給ふは万人を救ひ給はんが為である。神が少数の聖者を恵まんが為に宇宙と人類とを造り給へりと云ふは、それこそ大なる異端であると言はざるを得ない⁽²⁴⁾。

神は万能、無限であるはずである。その神が、自らの創造物である人間の大多数を切り捨てるとは考えにくい。また、救えずに切り捨てるのであるとすればそれは万能ではないであろう。故に全ての人間が救われるまで救済の事業は続くのである。

救はれし者は未だ救はれざる者を救はん⁽²⁵⁾と欲す、其所に信者の神らしき所がある。

(22) 内村の「二度目の回心」という用語については、内村「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」(1918年、『全集24』)に、またその内容については、前掲『余は如何にして基督信徒となりし乎』、内村「クリスマス夜話＝私の信仰の先生」(1925年、『全集29』)等に記されている。

(23) 前掲「再び万人救済説について」、175頁。

(24) 同前。

若し永久の休息に入るとならば万人が救はれた後でなくてはならない。救ふべき者の存する間は救済の聖業は終らないのである⁽²⁵⁾。

しかし、万人が救済されるのであれば一人一人の人間はただ何もせずとも、あるいは福音を受け入れずとも救われるのではないか、ということになるかもしれない。この問題について内村は、次のように答える。万能の神とはいえ、人間の救済とは困難を伴うものである。それは、我が子を十字架につけねば成し遂げられなかったほど困難なことなのである。神は一人の人間を救うために、全宇宙の能力を注ぎ込みさえるのである。

救は努力なくして行はるゝのではない。人一人が救はれんが為に、神は其一子を世に遣して、彼に十字架の苦しみを受けさせねばならなかつた。そして其人の為に多くの他の善人聖徒が熱き涙を流し、犠牲の血を流さなければならない。…勿論人の悪は神の善に勝つ能はざるが故に、彼れ一人を救はんが為に、神は全宇宙の能力を尽し、全人類の愛を注ぎ給ふべけれども、去りとて其時まで悔改めずして、神と人とに、自己の為に其の労苦を負はしめんとする、其心の憐れさよ、思ふだも人の心の頑梗^{かたくな}なるに我が心は張り裂けんとする⁽²⁶⁾。

かくも深い神の愛を知らされた時、人間はそれに応えないではいられない。またその過分な喜びを他に伝えずにはいられない、と内村は考えたのである。さらにこの、福音伝道とは喜びを伝えるためのものだ、という立場は予定説について述べた「予定の教義」の場合と基本的に異なっていない。

まとめに代えて

以上より、予定説、万人救済説それぞれに対する内村の理解をまとめておこう。予定説に関して内村が強調するのは、人間に対する神の優越、先行である。人間は自らの行いや努力には関わりなく、神の愛と恩恵により救われる。また、選ばれたものに苦難が伴うということから、内村は不敬事件以降自らの身に降りかかった苦難の意味付けを行っているとも考えられるであろう。苦難の中にこそ栄光がある、との逆転的発想は内村のキリスト教思想において特徴的な要素の一つである。彼自身が不敬事件

(25) 同前。

(26) 同前、176-7頁。

をめぐる一連の動きの中で流浪生活に追いやられ妻を失った時、あるいは愛娘ルツ子を若くして病のため亡くした時、内村がそれでも信仰を捨ててしまわなかったのは、このような逆転的発想をすることができたからであるとも思われる。彼は、信仰を保ち、福音の喜びを伝道し続けるように、神に選ばれているのである。

一方、万人救済説においても、やはり神の優越が主張されることは同様である。さらに、選びの問題をさらなる救済のための選びと解釈したことにより、神の愛と義の双方がそこなわれることなく、万人救済が成し遂げられるように考えられている。人間の側の行いや努力は問題にはならないが、悔い改めは不可欠なのである。但し、神の愛が先行して提供されているというため、それに深く感じた人間は悔い改めずにはいられないであろう、との構造ができあがっているのである。この、救済は神により先行してなされていながら、人間のほうで悔い改めることによりそれを受け入れねばならない、という形は、ウェスレーの救済論の内村における影響を感じさせるものと言えるのではないであろうか。札幌農学校時代にメソジストの宣教師ハリスから受洗しており、主に英米系の神学書を通してキリスト教思想を学んだ内村が、ウェスレーの救済論に影響を受けていることに不思議はない。

それでは、内村はなぜ予定説から万人救済説へと変化していったのであろうか。ここでは推測を示すことしかできないが、以下のように考えることは可能である。

自分自身の罪意識に苦しんだ経験があり、それゆえに贖罪論をとりわけ重んずる内村が、全能の神に限られた人間しか救済しないという考え方に対して違和感を抱いたとしても不思議ではない。そして、「余の信仰の真髓」を執筆してから「再び万人救済説について」を執筆するまでの間に、内村はいわゆる「三度目の回心」⁽²⁷⁾を経験している。この「三度目の回心」とは、内村が再臨信仰を確立したことを指し、彼の再臨運動と結びつくものである。

この再臨運動には様々な側面があるが、見逃せないのは第一次世界大戦（特にアメリカ合衆国の参戦）という終末的大破壊とも思われる事態に対する、内村なりの応答という面である。再臨運動は、この一見絶望的にも思われる事態に直面し、人間の世界は良くなってはいかないばかりか寧ろ悪くなっているように思えるにも関わらず、最後には神が必ず万物を復興させるのであるから、安心して人間は今為すべきことをすればよいという、希望運動だったと考えられるのである。そこで内村の終末観が深まり、救済ということに対する捉えなおしがおこったのではないであろうか。救済とは終末的に完成される事柄だからである。

さらに、予定という問題には、選ばれているのは誰か、という問題が付きまとう。

(27) 内村の「三度目の回心」については、前掲の「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」等でその事情が述べられている。

「再び万人救拯説について」において、内村は「若し^{〔ただ〕}唯少数のみが救はると云ふならば、其少数は誰である乎が大なる問題である。若し夫れが信者であると云ふならば、是れ亦大なる問題である。」⁽²⁸⁾と述べる。ところが、教会は一つではない。数え切れないほど多くの教派教会があり、「大抵の場合に於て『我が教会の信者のみが救はるのである』と云ふが普通である」と内村は記す。矢内原忠雄が未受洗のまま死んだ人間の救済について内村に尋ねた際、内村は、それは自分にはわからないが、矢内原が信仰生活を続けていく中で自然とわかってくるであろう、と答えたという⁽²⁹⁾。これは、現代日本の伝道論においても、決して避けては通れない問題である。内村は明言を避けたわけであるが、彼の答えからは、やはりそのような人間たちも救われて欲しい、という思いが感じられるのではないだろうか。彼の生きる日本で、キリスト者がマイノリティであることを内村はよく自覚していた。その中には数多くの、キリスト者ではないが善良で誠実な人々がいた。彼らと共に生きる内村は、彼らもやはり救われて欲しいと願っていたように、筆者には思われるのである。

(28) 前掲「再び万人救拯説について」、173頁。

(29) このエピソードについては、矢内原忠雄『内村鑑三とともに』（東京大学出版会、1962年）の59-60頁を参照した。